

4 文化は経済と並ぶ地域活性化推進の両輪

●徳島は文化あふれる地域

経済と文化は、地域の発展や活性化を促す車の両輪とよく言われます。お互いに影響を与え、作用し合うことで地域社会に活力をもたらします。

藍産業のところで見たように、江戸時代、藍商人たちの活躍は徳島城下を経済的に潤すこととなり、阿波おどりや人形浄瑠璃などの文化を大きく発展させることに貢献しました。また藍は、国の伝統的工芸品である大谷焼や阿波正藍しょうあゐしじら織などのさまざまな工芸品とも深い関わりがあります。大谷焼は、藍染めに欠かせない大きな藍甕あゐがめの需要で発展し、今も茶碗などの日用品から芸術的作品まで、幅広くつくられています。

一方、まさに阿波おどりがそうですが、文化の魅力で徳島を訪れる人が増えれば、地域経済にも好影響を与えます。このように、経済と文化は密接な関係にあり、徳島の素晴らしき文化の魅力をいかに経済の活力につなぐことができるかが、これから一段と重要なテーマになってくるでしょう。「文化は地域の力」であることを再認識することが必要です。

2012年の国民文化祭（愛称「おどる国文祭」）においては、徳島を代表する文化資源である「阿波おどり」、「阿波人形浄瑠璃」、「阿波藍」、そして徳島がアジア初演の地である「ベートーヴェンの第九」が4大モチーフになりました。

また、徳島にはジャズ文化が根づいており、徳島市内のライブハウスでは長年にわたり2月と8月に「徳島ジャズストリート」が開催されています。さらに、徳島市の中心市街地を舞台にした「マチ★アソビ」というアニメイベントを通じ、アニメ文化を徳島から国内外に発信する取り組みも2009年から続いています。2016年からは、映像クリエイターの聖地・徳島を目指し、「徳島国際短編映画祭」を開催するなど、映画やメディア芸術の振興も図っています。

このほか、四国共通の伝統的な文化として、四国遍路を支える「お接待」文化もあります。このように、徳島は多様な文化的魅力にあふれた地域と言っていていいでしょう。

●手をあげて足を運べば阿波おどり

さだまさしさん原作、松嶋菜々子さん主演で2007年に公開された映画「眉山」のクライマックスは、徳島市南内町演舞場での有名連による総踊りのシーンでした。連というのは踊り手のグループ、そのうち技能の優れた人たちが集まった連が有名連です。

阿波おどりは「日本3大盆踊り」などに数えられる、日本を代表する盆踊りで、約400年の歴史があり、人々の暮らしに根づき、時代の変化を巧みに取り入れながら継承し、洗練されてきました。

阿波おどりの魅力は、芸術的で美しいこと、三味線、太鼓、鉦かね、横笛などの「鳴り物」による生演奏で踊ること、観客も踊りに参加できること、だと思います。日本経済新聞による「参加できる祭り日本一」のアンケート結果では、阿波おどりが1位でした。有名連のほか、企業連や大学連、誰でも一緒に踊れるにわか連など、さまざまな連が存在します。県内各地で開かれますが、徳島市の阿波おどりが最も規模が大きく、毎年8月12～15日の4日間開催され、100万人以上の人出で、



阿波おどり ©徳島県

普段は静かな街が熱く変貌します。

近年は、全国各地で開催されるようになっており、中でも、8月下旬に行われる「東京高円寺阿波おどり」は、2日間で100万人を超える観客動員があり、東京都の代表的な夏祭りの一つになっています。

全国各地の阿波おどりと連携して阿波おどりを盛り上げていくことは重要ですが、徳島としては、「阿波おどりの本場は何と言っても徳島です」と胸を張れるよう、さらに工夫をしていく必要があります。全国の阿波おどり自慢の方々が徳島に集結し、一緒に踊って交流を深めたり、5月頃から本格的に始まる阿波おどりの練習風景を観光資源として活用するなど、いろいろな可能性があると思います。

眉山の麓ふもとにある「阿波おどり会館」では毎日、昼夜に踊りの実演があり、年間約15万人が来場し、観客も一緒に踊って楽しんでいきます。こうした、本場ならではのエンターテインメントショーを楽しむ施設があるのは、徳島の強みです。



トクシイ
©徳島市

阿波おどりは、世界中の人が楽しめる踊りなので、海外の観光客にどうやって阿波おどりの本場徳島に来てもらうか、という発想もこれからますます重要となるでしょう。

阿波おどりは、徳島をイメージする最大のキーワードであり、徳島空港の愛称は「徳島阿波おどり空港」、徳島市のイメージキャラクター「トクシイ」は、水の都にふさわしく、阿波おどりが得意な魚の妖精の女の子です。

●農村舞台上上演された阿波人形浄瑠璃

父母をさがして巡礼の旅に出た娘お鶴の悲しい物語

「傾城阿波鳴門」を知っていますか。

傾城けいせいというのは、城を傾けさせるほどの美人という意味で、阿波藩の藩主が美女に溺れたのを幸いに、悪い家臣がお家乗っ取りを画策したのが物語の発端はつたんです。

阿波人形浄瑠璃の代表的な演目で、お鶴の父のモデルになった人物の屋敷跡である徳島県立阿波十郎兵衛屋敷えやしよ（徳島市川内町）で毎日見ることができ、年間3万人近い人が来場しています。

阿波人形浄瑠璃は、各地に伝わる義太夫節ぎだゆうげと呼ばれる音楽による人形芝居のことで、かつては各地の神社



阿波人形浄瑠璃

の境内に建てられた農村舞台などで上演されました。農村舞台での上演を考えると、文楽の人形よりも頭かしらが大きく、人形の操作が大振りなのが特徴です。

県内には、全国最多となる88棟（2014年3月時点の調査）の農村舞台が残っており、その歴史的価値が見直され、10棟前後の舞台で、定期的に人形浄瑠璃の公演が行われています。農村舞台で自然の風を感じながら見る人形浄瑠璃はまた格別です。

国民文化祭に合わせて、徳島出身の作家で文化勲章を受賞された瀬戸内寂聴さんが、人形浄瑠璃の脚本を書かれました。徳島で暮らしたポルトガルの文豪モラエスをテーマにした「モラエス恋遍路」と、小松島に船で上陸し、平家を討つために屋島に向かう源義経をテーマにした「義経街道娘恋鏡」です。こうした新作の上演を増やして人形浄瑠璃ファンの裾野すそを広げることは、徳島ならではのエンターテイメントの魅力の発信につながりますので、それを集客にもつなげていきたいですね。

●ベートーヴェン第九、アジア初演の地

1918年6月1日、徳島県板東町（現鳴門市）にあった板東俘虜収容所ふりよで、ドイツ兵俘虜によりベートーヴェンの交響曲第9番、通称「第九」が全曲演奏されました。これが日本、アジアにおける第九の初演とされています。そこで、鳴門市は6月1日を「第

九の日」と定め、毎年6月の第1日曜日に第九演奏会を開催しており、「第九の聖地」ということで、全国から集まった約600名の大合唱団が高らかに第九を歌い上げます。

2018年6月1日の第九初演100周年記念式典には、ドイツ元大統領らが来日し、初演の時刻に合わせて、「よみがえる『第九』演奏会」が開催されました。

ところでこの収容所は、第一次世界大戦期、ドイツが実質的に統治していた中国の青島^{チンタウ}で、日本軍の俘虜となったドイツ兵を収容するためにつくられたもので、所長の松江豊寿^{フユキトシヒコ}陸軍中佐は人道的、友好的に俘虜たちと接し、彼らに自主的な活動を奨励しました。

敷地内には、多数の運動施設や農園、ウイスキー工場などがあり、俘虜たちは、もともと民間人だったため、パンや楽器の製造、印刷・製本、写真、土木などさまざまな技術を持った職人も多く、近隣の住民につくったものを販売し、またその技術を伝えました。文



「第九」アジア初演時のプログラム ©鳴門市ドイツ館

化活動も盛んで、演劇団やオーケストラが結成され、音楽会は、3年間で100回以上も開かれたそうです。

2006年に公開された映画「バルトの楽園」^{がくえん}は、第九の日本初演に象徴されるドイツ兵と日本人との交流を描いたもので、松平健さんが松江所長を演じています。また、鳴門市ドイツ館では、当時のドイツ兵の暮らしや音楽会のプログラムなど、板東の人々との交流の様子を伝える貴重な資料が展示されており、年間約3万人が来場しています。

日独友好の絆は今も続いており、鳴門市とドイツのリューネブルク市は姉妹都市であり、徳島県とドイツのニーダーザクセン州は友好協定を結んでいます。

年末になると日本各地で第九の音楽が流れ、日本人に圧倒的な人気を誇っていますが、こうした楽曲の日本、アジアにおける初演の地が徳島というのは、素晴らしいことです。

●お接待文化が心にしみる四国遍路

阿波（徳島県）、土佐（高知県）、伊予（愛媛県）、讃岐（香川県）に点在する弘法大師（空海）の足跡をたどり、八十八か所の霊場を参拝することを、四国遍路と言います。

88か所のうち、徳島県には1番札所^{うんべんじ}雲辺寺の24か所があり、四国遍路の出発点があることから、徳島は^{はうしん}発心のある66番札所^{りょうぜんじ}雲山寺から23番札所^{やくおうじ}薬王寺までと香川県との県境

道場、悟りを求める心をもつ場所と言われています。

2014年は弘法大師が四国八十八か所を霊場、つまり神仏から生きる力を与えられる神聖な場所と定めて1200年目の記念の年でした。お遍路さん（巡礼者）の数を正確に把握するのは難しいですが、年間約8万人とも言われ、近年は外国人の歩き遍路が大幅に増加しています。

2006年には「四国八十八箇所霊場と遍路道」のユネスコ世界文化遺産登録を目指し、登録の前段階にあたる暫定リスト入りに向けた共同提案書を文化庁に提出しました。

選定結果は、リスト入りに最も近い区分の位置づけでしたが、一方で、寺院と遍路道の大半が文化財として保護されていないなどの課題についても指摘があり、現在は継続審査となっています。また遍路道へのごみの不法投棄は早急に解決すべき課題であり、行政や関連団体などが連携し、登録に向けた取り組みが続いています。



第1番札所 靈山寺

すでに、紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）やスペインにあるサンティアゴ・デ・コンポステーラのキリスト教の巡礼道は世界遺産に登録されています。世界遺産に登録されれば、世界中の注目が集まり、内外から訪れる人がさらに増え、経済効果も期待できるでしょう。世界的な視野で四国遍路の持つ独自性をいかにアピールしていくかが重要です。

2001年から「四国八十八ヶ所へんろ小屋プロジェクト」が始まりました。これは、歩きお遍路さんが休憩・仮眠できる小屋をボランティアでつくっていくもので、海陽町出身の建築家、歌うた一洋いちようさんの設計により、一つひとつテーマをもった个性的でおしゃれなデザインへのんろ小屋がつくられています（目標89棟のうち、2020年3月時点で57棟が完成）。

四国には昔から、お遍路さんをお接待するという生活文化が息づいています。お遍路さんに食べ物や飲み物を差し上げたり、宿を提供したり、かたちはさまざまです。お接待することにより、よいこと（功徳くどく）を積む、自分の代わりにお参りを託す、という意味があると言われています。

お遍路さんに限らず、徳島、四国を訪れる人に、おもてなしの気持ちで接すること、そして心の交流が深まり、行ってよかった、また訪れてみたいという人が増えればいいですね。またおもてなしの心は、普段の生活の中でも相手を思いやり、気遣う気持ちにつながり

ます。人間関係が希薄になったと言われる現代においてこそ、一人ひとりがお接待文化から受け継いだおもてなし精神を持ち、実践していくことが望まれます。

●若者を惹きつける徳島発アニメ文化

徳島は、SF作品「地球へ…」などで有名な竹宮恵子さん（現京都精華大学名誉教授・2020年度徳島県文化賞）や、テレビドラマ化され大ヒットし、2020年にリメイク版も配信された「東京ラブストーリー」の原作者柴門ふみさんなどの有名な漫画家を生み出しています。

近年では徳島発のアニメ文化が全国的に注目を集めています。2009年に初めて阿波おどりのアニメポスターがつけられました。非売品だったためネットオークションで高額の値がつき、驚きました。このポスターを制作したのが、「ユーフォーテーブル」という東京に本社のあるアニメの企画・制作会社で、大ヒットし社会現象にもなった「鬼滅の刃」のほか、「刀剣乱舞」や「Fate」、 「おへんろ」など数々の人気アニメ作品をつくっています。

この年、この会社（近藤光社長は徳島県出身）が徳島市に制作スタジオを開設したのをきっかけに、行政、関係者が協力し、アニメイベント「マチ★アソビ」が徳島市の中心市

街地を舞台に始まりました。

最近では、毎年大きなイベントが春と秋に開催され、1回あたり約8万人もの来場者が全国から集まってきています。2019年までにのべ23回開催されましたが（2020年春は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止）、県によると、2017年秋開催の第19回における徳島県内への経済波及効果は、約7億3千万円にのぼると試算されています。

これからも、徳島発のアニメ文化が、国内外から注目されるといいですね。

皆さんは、徳島の文化といえど何を思い浮かべますか？

また、本場の阿波おどりの魅力を県外の人にどのように伝えますか？



マチ★アソビ ©徳島県